気軽にお散歩　（東京都・六義園）

東京北部の駒込にある六義園（りくぎえん）を歩いた。六義園は江戸の５代将軍・徳川綱吉から重用されていた川越藩主・柳沢吉保が７年の歳月をかけて造った江戸時代を代表する大名庭園である。築園は元禄15（１７０２）年。昭和28（１９５３）年に国の重要文化財に指定された。

園内にはかつて和歌に詠まれた名勝88ヵ所の景観が再現されている。現在残るのは22ヵ所のみだが、木々や水、石などを巧みに利用して多彩な空間が造り出されている。

ＪＲ山手線の駒込駅で降り、正門へ向かう。桜の時期のためか出入りが多い門をくぐると、すぐにピンク色が目に飛び込んできた。樹齢約60年とされている、しだれ桜だ。
いくつもの枝が長く延び、まるで頭上に桜が降り注いでいるように感じる。はらはらと散る花びらで花の雨のようにも見える。木の周囲には、ゆっくりと飲み物を飲みながら眺める人、カメラを構える人などが絶えない。

いつまでも桜の雨を楽しみたい欲求にかられながらも、しだれ桜に別れを告げ歩き出す。少し歩くと視界が開け、水辺に出た。大泉水と呼ばれるこの池は六義園の中央に位置し、園内の３分の１ほどを占める。岸には緑色の松が植えられ、池の上では水鳥が羽を休めている。その眺めをゆっくりと楽しむために、岸辺の茶屋で抹茶を楽しむことにした。赤い布が敷かれた長椅子に座って、温かい抹茶と茶菓子を味わう。抹茶の温かさと菓子の優しい味にほっとしつつ、水辺の景色を眺める。

ここで、ひときわ高い丘を見つけたので、登ってみることに。この丘は「藤代峠」という園内で一番高い山で高さは35メートル。和歌山県にある同名の峠から名付けられた。緩やかな階段を１段ずつゆっくりとのぼる。思ったより段数があり、予想以上の高さを感じる。階段もしだいに急になってきた。

少し息がきれてきた所で頂上にたどり着く。見下ろすと、大泉水を手前に園内の緑が広がっている。その中に桜のピンク色が散りばめられ、細かな所までじっくりと見ていたくなる。ふと隣を見るとあちこち指を差しながら、景色を眺める来園者もいた。

峠のてっぺんで景色と心地よい風を楽しんだところで、また少しずつ階段を下りる。藤代峠の裏手には細い渓流が流れていた。ゆったりと流れる水面に岸辺の木々が写り込み、幻想的な雰囲気。水の音とさわさわという木の葉の音で、和やかな気持ちになる。

多彩な色合いが目を楽しませてくれる六義園。ぜひ訪れてみてほしい。

「海員だより」